

---

# 東方改変録

幸太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方改変録

### 【Nコード】

N7578X

### 【作者名】

幸太

### 【あらすじ】

目が覚めたら何故か見知らぬ草原に居て

。

最弱ステータス主人公が正義だけで困難を乗り越え案外ハーレムになつたりする二次創作。

ゆっくりしていいね。

## 東方改変伝（前書き）

これは東方プロジェクトの二次創作です。

## 東方改変伝

「……………何処だ此処はよお」

気付けば俺は草原に立っていた。寝て覚めたら草原に居たのだ。全く不思議。

まるで夢みたいだ。

逆に言えば夢ではないようだ。肌で感じる風から足で踏みつけている草の感触から匂いまで、ありとあらゆるものを感じとれる。夢かどうか確かめる必要もない程にこの草原は現実味に溢れていた。

「はあ」

溜め息が出る。出ない方がおかしいというものだ。何せ結論として俺は訳のわからない場所に来てしまっているのだから。さて電車で帰らねば。しかし幸いなことにこの草原は見晴らしの良い丘になっていて民家が何処にあるかなどはすぐにわかった。しばし歩けば着くだろう。

「さて、ちよいと行きますか」

「何処に行く気？」

独り言に返事が来るなど中々珍しい。声の主の方へと顔を向けるとそこには巫女が居た。

巫女が居たのだ。俺よりも二つか三つ歳が低そうだ。それよりも何故か大きく肩を出したエロい巫女装束の巫女だった。

「いやあ、道に迷っちゃって。東京まではどう行けば良いかな？」

「アンタ、何言ってるの？」

何言ってるんだこいつと言わんばかりの顔で睨まれた。まあ良い質問を変えよう。

「此処は何処？」

「幻想郷。まあ博麗神社の近くの草っ原と言ったら正しいのかしら？」

げんそうきょう？博麗神社？取り敢えず無名な神社の近くらしい。

「何県？」

「けん？何それ。それよりアンタの質問にも答えたのだから私の質問にも答えなさい」

随分と冷たい巫女だ。それよりも県を知らないのか？最近の子は県も知らないのか？いや、この娘も俺と歳はそう変わらないだろうけど。

「アンタよね？結界を勝手に通り抜けたのは。ああ、惚けたって無駄よ。アンタの霊力と結界を抜けた輩の霊力は一致してるわ」

結界？

「すまん、何言ってるんだかさっぱりだ」

「まだ惚ける気？」

巫女は額に青筋を浮かべて俺を睨む。一体俺が何をしたと言っただ。「霊夢、その人は『外』から来てる。何も事情を知らずに幻想郷ま

で来てるわ」

突如巫女の後ろから声がした。いや詳しくは巫女の後ろから『スキマ』が現れた。そしてそのスキマから人が出てきたのだ。うわっ、超常現象。スキマから現れた人は外人の様な長い金髪とやたら高級そうなドレスを来た女性だった。スキマから手慣れた様子で降りると手に持っていた日傘を広げた。仕草の一つ一つが綺麗だった。

「紫、急に出ないでよびつくりするじゃない」

「あら、結構な付き合いになるから慣れているかと思ったわ」

「そんな得体の知れないものに慣れるわけないじゃない。それよりこれが外から来たって本当？」

俺を指さす巫女。

「ええ。本当よ。彼は外から来てる」

俺に手に向けるスキマ。

「あのー。俺はどういう状況に置かれてるんでございましょうか」

スキマの人はコホンと咳払いをすると俺に顔を向けた。随分整った綺麗な顔をしてらっしゃる。

「初めまして、私は八雲紫よ」

「どうも伊井一<sup>い い ひと ひと ち</sup>です」

「取り敢えず貴方が陥っている状況を説明するわ。結論としては貴方は異世界に居ます」

嘘だろ。

「……………言葉が出ませんね」

「出てるじゃない」

五月蠅いぞ巫女。

「此処は幻想郷。妖怪と人間が共存している世界。でもって私<sup>わたし</sup>八雲紫は管理人いや、スキマ妖怪だから管理妖怪かしら」



八雲さん妖怪だったの！？というかスキマ妖怪ってなんだよ。あのスキマから出てくるからスキマ妖怪？

「夢を見てる気分ですよ。些か信じられないですね。信じざるを得ないのでしょうが」

ふふ、と笑う。スキマ妖怪八雲紫さん。

「事実は小説よりも奇なりってか」

全くもって事実だ。

「帰りたいのなら結界が治ってから帰りなさい。治ってからでないと何があるかわからないから」

案外簡単に帰れるようだ。

「それじゃあ治った時はお願いします。後どれくらいで治りそうですかね？」

「一年あれば確実ね」

そんなにか。その間に俺はどんな扱いになってるやら。搜索願いを出されていてもおかしくはないだろう。

「貴方行く宛はないのでしょうか?」

「まあ、はい」

「ならこの娘の家にでも泊まっていきなさい。流石に妖怪の家には泊まりたくはないでしょう?」

紫さんさっきまで空気と化していた巫女を指さす。紫さんの家でも一向に構わないのだが、一応見知らぬ土地であるならば同じ人を頼りたい。

「霊夢、勿論平気でしょう?」

「平気だけど勝手にアンタが決めないでよね」

「巫女さん、よろしく」

「博麗霊夢よ。さっき説明した博麗神社の巫女をやっているわ」

「伊井<sup>ひといち</sup>。よろしく頼む」

「それじゃあ霊夢よろしくね」

と紫さんは俺と霊夢を残してスキマへと潜っていった。本当にスキマ妖怪なんだと今頃感心する。

「あの腹黒女あ」

巫女さんは随分機嫌が悪いご様子。

「まあ良いわ。着いてきなさい」

そして俺は機嫌の悪い巫女、博麗霊夢の後へと続いた。

「フフフ、面白い子が来たわね。フフ」

スキマ妖怪は不気味に笑う。幻想郷などというふざけた空間を作りあげた妖怪の頂点に立つ妖怪は笑う。

「紫様、随分機嫌がよろしいですね」

式である九尾の狐は主の機嫌を伺う。何せ気味が悪い程に良いのだから。

「私の作った結界をたった一人で無意識の内に突破した人間が居るわ」

「なんですって？」

九尾の狐は心底驚いた。それは自分の主が結界制作のプロフェッショナル故の驚愕。恐らく主である八雲紫に結界に関して上回る者などいないだろう。ましてやその八雲紫が時間を掛けて作った最高傑作である幻想郷の結界をたった一人の人間が、しかも無意識の内に破ったのである。

「その人間が今、博麗神社に居るわ。藍、見に行く？」

「その内には、今はそれよりも結界の修復でしょう？紫様」

「ええ。そうね」

ずずず。と茶を啜る音が部屋に響く。部屋と言っても神社なのだが。

「まったりするのは良いわねえ」

お前は婆か。

「ああ」

ずずず。

まったりしすぎて怖い。

ばりばり、ばりばり。

「この煎餅美味いな。」

「当たり前よ。歴代の博麗の巫女の中で一番働かない私は歴代の中で一番茶と菓子のセンスは良いわ」

自信に充ち溢れた顔で言うことではなかるう。恥ずかしくはないの  
だろうか？

「自分で言っでてどう思っ？」

「屈辱よ」

「なら言っなや」

ずずず。

「なんだこのまったりとした空気はああああ！！」

この空気を打ち破ったのは俺でも霊夢でもなかった。

「あら魔理沙来てたの」

突如現れたのは黒い帽子に黒いエプロンに黒いスカート、金髪に幼  
さを残した可愛げな顔が特徴の女の子だった。

「霊夢、この人は誰だ？」

「こいつはー」

「伊井一。初めまして」

「おう！私は霧雨魔理沙。魔法使いだ！」

魔法使いだと。

「凄え！本物？格好良いな！！」

「へへ、そんなに誉められると照れるぜ。というかーは魔法使い知らねえの？」

こいつは外から来てるのよと霊夢。

「うわっ。ーも凄いじゃないか！」

「そんなに誉めるなよお」

「五月蠅いわねえ」

霊夢ひどい。

「それよりも魔理沙、あんた何しに来たのよ？」

「いやあ、パチエの所へ行こうと思ってたんだけど暇だし霊夢でも誘おうかなあって」

ふうん、と霊夢。

「まあ良いわ。丁度咲夜に紅茶を貰おうかと思ってたところだし着いて行くわ」

「何処行くんだ霊夢？」

「紅魔館。吸血鬼の屋敷よ」

巫女に妖怪に魔法使いに吸血鬼。吸血鬼は妖怪か。まあ、とにかくなんでもありだな幻想郷。



「ついて来る？」

「血とか吸われないか？」

「平気よ。それに関しては保証するわ」

もはや城。それが初めて紅魔館へ訪れた俺の感想だった。館や屋敷で片付けるのが勿体ないくらいに紅魔館はデカかった。というか幻想郷は博麗神社のような日本家屋から紅魔館のような洋式な館までなんでもアリのようだ。

「さっさと入りましょう」

俺が感傷に浸っていると霊夢が俺の袖を引っ張り門まで案内してくれた。

「受付とか平気なのか？こんなデカイ館なのに」

平気よと霊夢が指さした方向には門番が居た。

ただし昼寝中のご様子。

「こんな警備で良いのかよ？」

「大丈夫。此処の物は魔理沙くらいしか盗らないわ」

「おいおい。酷いぜ霊夢」

「事実じゃない」

「ありや借りてるだけだぜ」

「無断で借りたら窃盗と変わらないわよ」

「うー」

可愛く膨れる魔理沙。ただしこの件はお前が悪い。

門をくぐり屋敷に入る。屋敷の中はやたと暗い。

「暗いなあ」

「当たり前でしょ吸血鬼の屋敷なんだから」

うむ。そう考えると雰囲気出る。というか怖い。

「すまんトイレ行きたいん何処かわかるか？」

「そこよ」

まるで自分の家かのように廊下の辺りを指さす霊夢。

「アンタが迷うといけないから私たちは此処で待ってるわ。早く済ませて頂戴」

「わかった」

小走りでトイレへ向かう。本当に霊夢が指さした方向にトイレはあった。随分来てるんだろっな。

「ふう、すっきりした」

「この紅魔館に何のようですか？」

トイレから出ると突如現れたメイドに声をかけられた。髪は綺麗な銀色で不思議な雰囲気醸し出していた。

「用という用はないけど強いて言うなら吸血鬼に会いに来た」

「ほお、主、お嬢様に会いに来たと。一人で紅魔館に来るとは中々の肝の座りようですね。まずは美鈴を突破と、霊夢との件くだんを思い出すわ。それでは掃除でもしましょうか」

殺気。この人、俺のことを

殺そうとしている。

背筋が凍って動かない。息苦しい。

そんな間にもメイドさんは何処から取り出したかはわからないがナ

イフをそれぞれの指の間に持っていた。

「名乗り忘れましたね。十六夜咲夜。紅魔館のメイド長です。ではお休みなさい」

時間が止まった。

動いているのはこの空間で咲夜さんただ一人。時間が止まっているだけで目に見えてわかる。無数のナイフが俺に向かって投げられていく。

このままじゃ死んでしまう。

そう思った時、横一閃に光が走り、俺に時間が戻った。

「危なかったぜ」

「魔理沙に霊夢？」

咲夜さんがおどけた声をあげる。

「咲夜、そいつは私の連れよ」

咲夜さんは顔を驚愕で一杯にした後、土下座でもするんじゃないかという勢いで頭を下げた。

「申し訳ありませんでした」

「いや、平気ですよ。顔を上げてください。魔理沙が助けてくれました。それよりさっきのなんですか？金縛りみたいな。あれが魔法ですか？」

「あれは私の能力です。『時間を操る程度の能力』」

程度じゃないだろうその能力。

「そうなんですか。魔理沙とか霊夢にもあるの？能力」

「ああ私は『魔法を扱う程度の能力』らしいぜ」

魔法使いらしい能力だ。

「私は『空を飛ぶ程度の能力』」

霊夢って空飛べるんだ。知らなかった。

「なあなあーにはあるのか？能力」

「ないと思うぜ外から来てる訳だし」

「！？外から来たのですか？」

「ああ、はい。そうらしいです」

「珍しいですね。改めまして私は十六夜咲夜です」

不思議な名前だなあ。全員に言えることだが。

「俺は伊井一と言います。よろしく」

「ええ。こちらこそ」

閑話休題。

この館の主人である吸血鬼に会いたいと言ったらあっさりオーケーを貰った。そして今咲夜さんの案内で吸血鬼の部屋の扉の前に居る。因みに魔理沙は用があると言って図書館の方へと向かった。

「レミイ、入るわよ」

霊夢がそう言い扉を開ける。すると中はなんとというか吸血鬼のイメージが頭の中で一瞬にして崩壊した。部屋はファンシーシヨップ同然だった。数多くのぬいぐるみ囲まれた可愛い部屋だった。

「あら霊夢じゃない。その男は誰？」

中からは青い髪をした幼い女の子が出てきた。

「こいつは」

「伊井」

「あら、そう」

「レミリア・スカーレットよ」



小さな吸血鬼は僕に手を差し伸べた。

レミリアの手を取る。その様子を咲夜さんが写真に収めていた。いつの間に。「なあ霊夢、この屋敷の主は？」

「それがレミィなのよ。気付きなさい」

気付くには無理があるだろう。

「まだこんなに小さい女の子がか？」

「失礼ね。少なくとも貴方の50倍程は生きてるわ」

500才は軽く超えていると。信じられん。

「なに驚いた顔してんのよ。妖怪なんてそんなものよ」

霊夢がさぞかしつまらなそうに俺を見る。

「仕方ないだろう。外から来たんだ。幻想郷に来て1日も経ってないんだぞ」

「貴方外から来たの!？」

見た目相応に目を輝かせるレミリア。

「ああ。そうだよ」

「外って此方と何か違う?」

意外にも驚いたのはレミリアだけでなく霊夢やシャッターチャンスを探っていた咲夜さんまでもが携帯電話に興味を示した。

「外の世界の電話だよ。持ち歩くことができる」

「す、凄い!」

レミリアの感激する姿はやはり無邪気で子供らしいものがあった。

「どうやったらこんなに小さくなるのかしら?」

霊夢や咲夜さんは電話の進歩に驚いていた。

俺が何か関わった訳でもないのに何処か誇れるものがあつた。日本の、世界の科学技術に改めて感動した。

「ところで質問。レミリアは人の血を吸うわけ？」

「そりゃ吸うわよ。吸血鬼なんだから」

此処に来てやはり妖怪というものを実感する。

「まあ安心しなさい。致死量まで吸わないわ。それが吸血鬼という生き物よ」

「それでこの紅魔館では」

いつの間にか咲夜さんが背後に回り込んでいた。

「お客様の血を入場料として頂いているの」

続けてレミリアが血も凍るような決め台詞を言い終えた。

そして俺の首筋にかぶりと犬歯を滑りこませ血を吸い上げる。痛みはない。寧ろ美味しそうに唇を動かすレミリアがエロチックで悪い気はしなかった。耳元で咲夜さんが「殺しますよ（ばらしますよ）」などと言わなければ。

「ぷはあ。美味しかったわ」

「うわっ!？」

「いつ見ても慣れないわね。レミィのあれは」

甘美な表情をしているであろうレミリアの顔は確認できなかった。レミリアの顔一面が

赤い。

赤。朱。紅。

真っ赤に、真朱に、真紅に染まっていた。

その姿は本物の吸血鬼。顔を紅に染めて、頬を緩ませるそれは吸血鬼でしかなかった。

「お嬢様、顔に血が付いていますよ」

咲夜さんがポケットから出したハンカチでレミリアの顔を拭く。

「どう？驚いた？」

「ああ驚いた。本当に吸血鬼なんだな」

「信じてなかったのかしら」

「半信半疑と言ったところだったけど、今となっては信じざるを得ない」

「そう」

暗い顔をするレミリア。この館に人が少ない理由がわかった。彼女を鬼と知った人間で此処に近付くのは霊夢や咲夜さんくらいなのだ

ろう。鬼故に人に避けられる。彼女自身もわかっているのだろうが幼さ故に辛いものがあるのだろう。

「大丈夫。また来るよ」

「その時は入場料は頂くわよ」

「血なんかでいいならくれてやるよ」

吸血鬼の友達ができた。ちょっと前まで信じちゃいないものと友達になった。それどころか血を吸われたりとオカルト好きの奴等に聞かせたらなんと云うのだろうか。

「レミリア、この館には他の吸血鬼は居ないのか？」

「居るわ。ただし会わない方が良くわよ。あの娘程吸血鬼らしい吸血鬼なんて私は知らない。鬼と人間は交わるべきではないわ」

その後紅魔館から帰る前にその吸血鬼の話聞いた。名をフランドール・スカーレットと言らしい。レミリアの実の妹。フランドールは紅魔館の地下に籠っていて外には出ないらしい。理由を上げるなら幽閉されているからだ。

フランドール・スカーレット。彼女は吸血鬼でありながら血の吸い方を知らない。彼女が血を吸えばその人間の血という血が吸い出され命という命が散っていく。彼女は命を壊す悪魔。鬼にすら理解されなかった鬼。鬼の中の鬼。

俺の知っている吸血鬼のイメージそのものだった。

「可哀想だなフランドールって娘」

「そもも言えるけれど鬼にすら理解されない鬼なんて妖怪の次元を越えてるじゃない」

霊夢の言う通りなのかもしれない。ただ姉妹が姉妹らしく笑えない理由など簡単にあっけはいけない。何時まで経っても胸のつかいは取れなかった。

「お早う霊夢」

幻想郷で初めての朝を迎えた。これから一年、幻想郷での生活が始まるのだろつ。

「お早う。さつさと朝食を済ませて神社の掃除を手伝いなさい」

「悪い。今日は紅魔館に行くから掃除は手伝えない」

俺は昨日からずっとフランドール・スカーレットのことが気になって仕方がなかった。血の吸い方を知らない吸血鬼。鬼にすら理解されない鬼。そんなフランドール・スカーレットが

『可哀想』で仕方がなかった。

「あんた変わってるわよ。異世界に居ることをなんら躊躇なく受け入れるし、吸血鬼に興味を持つし、ましてやフランドールにまで」

「好奇心が強いだけだろ」

ふうん、と流す霊夢。

それにしても何故俺は異世界に来たことを焦らなかったのだろうか。普通なら焦るところか頭がおかしくなっても不思議ではない。一日寝込んで不思議ではない。なのに俺はあっさり認めてしまっていないのだ。寧ろ初めて幻想郷に着いた時に薄々勘づいていた気もしくもないのだ。



恐らく俺は幻想郷に来た理由を知っている。

焼き魚に漬物、味噌汁。そして白米のセットが二組並んだちゃぶ台。  
日本の朝食だ。

「旨そうだ。霊夢って意外に料理上手いな」

「失礼ね。料理くらいできるわよ」

ちゃぶ台に霊夢が着く。

「いただきます」

「うん。美味い」

ふうん、と言いながらも照れる霊夢。案外可愛いところがある。普段素っ気ない態度ばかり取っているものだから元々霊夢が中々の美少女であることを忘れてしまっていた。

「何よ。人の顔じつと見て」

「いや、頬っぺたにご飯粒付いてる」

「えっ嘘!？」

慌てて頬っぺたを探る霊夢。

「嘘」

「騙したわね」

霊夢の沸点は中々低い。ちょっとしたことで容易く怒る。まあ溜め込まれるよりは良いのだろうか。

「ごめん、ごめん。そろそろ紅魔館行ってくるわ。ごちそうさま」

「あつ待ちなさい私も行くわ。どうせ暇だし」

「掃除はどうした掃除は」

「良いのよ。どうせ参拝客なんて来ないから」

霊夢は案外いじけていた。

今日の紅魔館はというと、門番が働いていた。背が高く、チャイナドレスに似通った服装が抜群のプロポーションを強調していた。

「あの、紅魔館に入りたいのですが……………」

「むむ、お客様ですか？それとも敵！？」

門番は急に姿勢を変えこちらに拳を突きだす。拳法のような構えを取りこちらを睨み付ける。生憎、俺の支度が遅かった為に顔見知りである霊夢は先に紅魔館に入ってしまった。

「博麗霊夢の知り合いなんですけど通してもらえませんかね？」

「騙されませんよ」

話に通じない。何故俺は初対面の人に敵意を剥き出しにされる。

「かくなる上は……………」

「やる気になったようですね」

必殺を見せてやる。

「あつ！？あんな所に！？」

虚空を指さす。それはもうオーバーアクションに。

「えっ！？」

門番は空を見上げる。その隙に門を走り抜けた。

「門番が馬鹿で良かった」

失礼なことだと思いがあの手のことに騙されるのは大抵馬鹿だ。前  
回来た時は昼寝していたし。紅魔館の門番、恐れるに足りん。

「レミリアー！！会いに来たぞ！」

ベランダでお茶を飲んでいるレミリアを発見したので声をかけてみた。

「あらーじゃない！」

「上がっていい！？」

「良いわよ。入場料は貰うけどね」

ニコツと笑顔になるレミリア。そんなに俺の血は美味いか？

「待てええええええ！！侵入者あああ！！！」

物凄い勢いでこちらに駆けってくる門番。追いかけてきやがった。門番の仕事サボるなよ。

「喰らえー！！！」

門番は美しい跳躍を決めるとその長い脚を伸ばし俺の顔面へ向けて放った。飛び蹴りが頬に突き刺さった。

「うぎゃあっ！！」

白か。

俺の意識はここらで途絶えた。

目を覚ますと門番に咲夜さんにレミリア、それに霊夢も居た。

「申し訳ありませんでした」

門番はペコリと俺に向けて頭を下げた。

「お客様とは知らずに失礼な行為をしてしまつて」

「気にしないでいいよ門番さん。こっちも弁解せずに入つたわけだしお相手つてことで」

「ありがとうございます」

深くお辞儀をする門番さん。そんなに畏まらなくてもいいのに。

「俺は伊井一。これからよろしく」

手を差し出すと門番もゆっくりと手を取った。

「紅美鈴です。よろしくお願いしますね」

門番、改め美鈴はニコリと笑った。しかし直ぐ様咲夜さんに首を掴まれ仕事に戻るようにと言われた。どうやらサボる癖があるようだ。

「では一さんまた今度！」

「美鈴、早く戻りなさい」

どこか抜けた感じがある咲夜さんもうこう見るとやはりメイド長なんだという実感が沸く。

「一さん今日はどのような用事で?」

「まずは屋敷の主であるレミリアに確認が取りたい」

「何?言ってみなさい」

俺は此処に来るまでに大分覚悟を決めてきた。

「フランドール・スカーレットに会いたい」

場に沈黙が流れる。最初に口を開いたのは幼い成りをしたレミリアだった。

「目的は何?」

「フランドールとレミリアは姉妹なんだろう?なら仲良くするべきだと俺は思っんだ」

「フランドールに会うのは吸血鬼の私でさえ危険なの。人間のあんたが行ったら」



命の保証はできない。

「わかってる。半日考えたよ。それでも折角の姉妹なんだ、仲良くするべきだよ」

呆れた顔をするレミリア。

「そんなことのために命を捨てる気？」

「姉妹が仲良く笑えるために尽きる命ならそう悪くないと俺は思う」

「わかったわ。そこまで言うのなら私に着いてきなさい」

## 東方改変伝（後書き）

小説って難しいそう感じた幸太です。もう少しストーリーを引き延ばして書きたかった。文章力をつけたいです。

あつ、できればで良いんで感想ください。

## 破壊衝動（前書き）

更新遅いのはこのページ量って……………

こんな駄作でよければゆっくりしていつてください

## 破壊衝動

レミリアは地下への道へと歩いていった。ただ俺はそれに着いていく。後ろには霊夢や咲夜さんも着いてきている。もしものに備えて戦闘の出来る二人が着いてきた。美鈴は戦闘になった時の屋敷の守護のため屋敷全体の番をしている。戦闘になれば屋敷が吹き飛びかねない。

吸血鬼とはそういうものなのだ。一度戦になれば山は平地に草原は焦土になる。それが破壊の象徴である鬼の戦闘。

「そろそろよ」

地下をしばらく歩いて見えて来たのは牢屋という喻えが妥当であろう部屋の扉。鎖が何重にも巻かれていて吸血鬼が苦手とする十字架が幾つも掛けられていた。

「咲夜、十字架を外して頂戴」

「わかりました」

十字架を外した途端に嫌な気が身体中を回る。

「ゲホッゲホッ」

「このお札を持っておきなさい。楽になる筈よ」

霊夢に渡されたお札をポケットへと入れる。すると気は感じなくなり体も楽になった。

「何だっ たんだ？」

「妖気よ。妖怪が持つ生命力の源。そもそも人間と妖怪では補食関係にあるから強い妖怪が敵意を見せれば人間の内臓を破壊することくらい容易いわ」

「つまり」

「そう。フランドールは此方に気付いているわ」

「そうかい。じゃあコソコソやる必要も無くなったしコソコソする気も無え俺は正面から行くとするよ」

「あつ、馬鹿っ！！なんの準備もなしに」

「フランドール、入るよ」

ガチャリ。意外にも簡単に、軽々と扉は開いた。

部屋の中は暗かった。明かりは部屋の隅に点けられた蠟燭だけで、  
かろうじて中の様子が伺える程度のもだった。部屋の中には千切  
られた縫いぐるみ、壊れた椅子。部屋の奥の唯一と言っていいと思  
われる大きなピアノ。そして蠟燭に近くで座り込む金髪の少女。

「こんにちは、フランドールちゃん」

「お兄ちゃん、誰？」

「君を上へと連れ戻しに来た」

「ふうん、そんなことよりもさあ」

フランドールは立ち上がった。細い脚で細い体を持ち上げ、畳んで  
いたであろう虹色の翼を広げて。そして

「お腹減っちゃったからお兄ちゃん喰べさせて」

高らかに死刑宣告をするのであった。

「くっ」

先に飛び付いたのフランドールではなく霊夢だった。霊夢は俺とフランドールの中間距離に立ちお札を手に戦闘体勢へと入った。

「一、退きなさい。死ぬわよ」

「俺が居ないでどうする!!」

「状況を考えなさい阿呆」

フランドールは心底暇そうに髪を弄りだしもう片方の指で俺たちの人数を数えだした。

「ひい、ふう、みい、4人かあ。お腹一杯食べれそうだね」

刹那。フランドールは霊夢の懐へと潜り込んでいた。

「なっ!?!」

次の瞬間には空気が張り裂ける程の轟音だった。ただ単純な細腕から繰り出される拳がこの音を作り出したのだ。気付いた時には霊夢は壁に張り付けにされていた。

「霊夢!?!」

「お兄ちゃん余所見はだめなんだあ」

遠距離だというのに近付いてすらないのに肩の辺りが裂けた。

「ぐあああああああ!!痛いあああ!!」

突如襲う痛み。体が裂けんばかりに悲鳴をあげる。何が起きたというんだ。

「今のは妖力弾です。妖気を物理的な力に変えて撃ち出すのです。気をつけてくださいね」



気付けば咲夜さんも前線に居た。

そして後ろに居るもう一人を確認する。そこでは偉大なる吸血鬼が震えていた。レミリアは怯えていたのだ。耳を塞いで涙を流して怯えていた。

「元々私は吸血鬼ハンターだったのですよ。吸血鬼との立ち回りは私が一番知っています。私が彼女を落ち着かせたら貴方が彼女を救ってください」

そう言い咲夜さんはナイフを構えフランドールの元へ走り抜ける。

俺がフランドールを救う。やってやる。やってやろうじゃねえか。やるって決めたんだ。絶対に救ってやる。

「時間よ……………」

咲夜さんは時間を操る程度の能力を発動させる。あの空間では咲夜さんしか動けない。絶対的な力を持つ吸血鬼でも時間に干渉する咲夜さんを捉えることはできない。人間にも妖にも平等に流れる命の根本にして世界の始まりにしてこの世のありとあらゆるものの絶対服従である時間には吸血鬼ですら逆らえない。

「じゃまあ……！」

そんな時間による攻撃が始まろうとした直後、時間が死んだ。

能力による時間干渉が終わった。完膚なきまでに壊され、殺された。そしてフランドールの破壊の矛先は咲夜さん自身へと向いた。

「なっ!?!」

「いただきます」

「させる訳ないでしょうがっ!?!」

不可解な動きをしたお札がフランドールの前まで高速で近付き爆発する。常人なら木っ端微塵になるその一撃に対してフランドールは若干顔をひきつらせるだけだった。

「霊夢大丈夫かよ?」

「あんたの方こそ平気なの? 普通の人間でしょ?」

「そっという霊夢だってただの……………」

さっきのお札は霊夢のだ。霊夢が此処まで着いてきたのも戦闘出来るから。それにさっきの拳を受けてひよろつとした顔で戻ってきたのも普通ではない。普通あの拳は必殺なのだ。必ず殺す技。皮膚を貫き内臓を抉り命という命を喰らい尽す必殺。腹筋が凄いでは話がつかないだろう。

「簡単に言つと私は強いだよ。幻想郷で一番くらいにね」

最強じゃないか。

「その貴女。そんなにお腹が空いているのなら私を食べると良いわ。まあ私を倒せたらの話だけどね」

踏み込み。たつたそれだけの行為で5mほどはあつた距離を0まで詰める。

「喰らいなさい!！」

しかしお札は空を切る。

「はぁああっ!！」

フランドールが妖力弾を出す。しかしその数は圧巻だった。まるで弾幕だ。そんな弾幕が高速で飛び交う。

「私のことを忘れてはいませんか？」

舞うは白銀。ナイフを構えた咲夜さんはフランドールの時間を止めナイフを無数に投げる。そしてその無数のナイフ全てが吸い込まれるようにフランドールへと向かっていった。

しかしその全てのナイフが未知の現象で破壊され、フランドールにたどり着く前に銀の砂となって落ちていく。

「何処向いてるのよっ！」

連係。お互いが連続して攻撃しフランドールの隙を作る。対するフランドールは霊夢達の弾幕を壊すだけだった。

破壊、破壊、破壊。

霊夢や咲夜さんがどんな攻撃を放とうともその攻撃は破壊されていくだけ。一向に通らない。寧ろ攻撃をし続ける霊夢達の体力が削られていく。

「なんなのよあの能力!!」

「わかりません。少なくとも私達の攻撃は全く効いてません」

「仕方ないわ。私達の全力でやるしかないそうね」

突如霊夢の周りが蒼白く光りフランドールの足下に陣が浮かび上がる。

「夢想天生！！」

フランドールの陣が雷の如く発光する。そして凄まじい轟音が響く。

「博麗の巫女最強の技よ」

まさに言葉通り最強。夢想天生は相手を束縛しながら力を放ち続ける。素人の俺でもわかるくらいの力がある陣の中で働いている。

「秘技、殺人ドール」

そして咲夜さんが追い討ちを掛ける。両手を不自然に上げナイフを構える。その姿は人形を連想させる。そして咲夜さんの時間が作ら

れる。

目視できない程の速さでナイフを撃ち込む。普段の咲夜さんからは想像の出来ない俊敏な動き。獲物を見つけたような目。投げられていくナイフは銀色に瞬きながら流星のようにフランドールへと向かう。こうして初めて咲夜さんが吸血鬼ハンターだったということを確認出来る。使っているナイフも吸血鬼が苦手とする銀。そして殺人ドールはその名の通り殺すための技。殺すための効率を考えた姿勢。すぐにトップスピードに入るナイフ。的確に急所を狙う技術。銀色の流星は断罪の杭となって鬼の心臓を抉る。

そんな吸血鬼を殺すことに特化した彼女は何故吸血鬼のメイドをしているのだろうか？

そんなことを考えていた。

考えるだけの余裕があった。フランドールは止まると思った。絶対的なまでに止まる自信があった。寧ろ彼女の命の心配すらしていた。しかしそんなことはフランドール・スカーレットにはまるで必要がなく。関係のないことがわかった。

夢想天生で無に返り、殺人ドールで刻まれた筈の彼女は笑っていた。

吸血鬼が冷たく笑っていた。

「う、嘘よ。夢想天生が効かないなんて」

「銀の効かない吸血鬼なんてっ!？」

有り得ないと二人は言おうとしたのだろう。だが現に成し得た吸血鬼が居る時点でそんなの虚言にすぎない。

「あぶない、あぶない、空間を壊さなかったら死んでたわ。それじゃあ、今度こそ」

いただきます、とフランドールは言った。刹那的にフランドールは両手を前に出す。

「禁忌レーヴァテイン」

轟。爆音がした。フランドールの手の中で何かが構成されていく。赤黒い、血を連想させるそれはフランドールの手の中で巨大化する。それが何なのかわかるまでにそう時間は掛からなかった。

「槍？」

赤黒い血色の槍が構成されていく。フランドールはその槍を手に取り

り目標目掛けて振りかぶる。

ああ、あれに当たれば終わるんだな、と容易くわかった。どんなに強かろうと喰らえば終わる。霊夢だろうと咲夜さんであろうと例外なく喰い荒らされて終わる。完膚なきまでに壊されて壊されて壊されて破壊し尽くされ殺される。あれが吸血鬼。本当の吸血鬼。人間如きで歯向かえる相手ではなかった。歯が通らないどころかへし折られる。そんな例外的最強が吸血鬼。その例外的最強の中の別格、フランドールスカーレットともなればこうなる結末は当然だった。むしろ運命だろう。

血色の槍は投げられた。

あれで終わりだ。終焉なんだ。俺はそれでいい。その覚悟もあった。けれど俺の我儘で連れてきた霊夢や咲夜さんはどうなる？俺の勝手で死ぬのか。そんなことがあって良いのか？

「糞つたれがあっ！！」

血色の槍の前に立つ。わかっている、俺では盾にすらならないことくらい。それでもけじめくらいつけたい。それに奇跡だって信じてない訳じゃない。



ひれ伏し、消し飛ぶ筈の腕は血色の槍を押さえていた。それでも、今にでも千切れそうな腕の痛みが毎秒訪れてくる。

「があああああつ！！」

「一つ！？あんた！！」

霊夢は驚く。そう、例え幾ら千切れそうであろうとも俺の腕は血色の槍を押さえている事実には変わりはない。

奇跡は起きた。

原理なんてわからない。種も仕掛けもあるかもしれない。それでも俺の腕は指から肩まで何一つ失うことなく槍を押さえつけている。まだ俺達は終わらない。

「すごいね。だけど無駄なんだあ！！」

フランドールが槍へと力を注ぐ。決して力を注いでいるところを見ただけではないが、なんとなくそんな気がした。理由はどうあれ槍は莫大な力を更に飛躍させ俺の腕を喰い千切ろうとする。

「がああああ！！」

喰い千切られると思った腕が重みから解放される。一瞬、腕が吹き飛ばされたのかと思った。けれど腕は指先から肩まで原型を留めていた。そして辺りを見回すと当たる筈のないであろう天井に槍が突き刺さっていた。

「運命を操る程度の能力」

泣いていた筈のレミリアが誇らしげに言った。恐らく血色の槍はレミリアによって無力化されたのだろう。槍が俺達を貫く運命を変えたのだ。

「ねえ」

レミリアは吸血鬼らしからぬ聖母のような笑みで言う。

「私には話したこともない妹のために戦うことなんてできなかった。だから私は貴方を守るために戦うことにしたわ。だから貴方は私のために、私の妹のために戦って！！」

「わかった。ちょっとフランドールを助けてくるから俺に何かあったら助けてくれ」

「ええ。全力を持って助けてあげるわ」

「それなら安心だ」

足は軽々と動く。フランドールへと全力で駆け出す。向かってくる弾幕は当たらない。霊夢、咲夜さん、レミリアが弾幕を潰してくれている。もう、俺とフランドールの距離は10mもない。

「来るなああああああああああ！！」

叫ぶフランドール。弾ける弾幕。身体中に無数の傷ができる。レミリアの運命操作がなければ今ごろ死んでいただろう。それでも今にも意識は刈り取られそうになる。残った距離は後一步。

「フランドオオオル！！」

そして一步を踏みきった。

「やめてよ！！お兄ちゃん死んじやうよ！！私と一緒に居たら死んじやうよ！！早く離れて！」

やっと本心が聞けた。人を食べると言っていたフランドールは所詮

脅しでしかなかった。

そもそもフランドールの力があれば監禁などされるわけがない。されたとしても容易に脱出できる。

「私の能力はなんでも壊しちゃうの。大好きなものも一瞬で壊しちゃうの。だからお兄ちゃんも壊れちゃうよ」

多分フランドールは一時的には閉じ込められていたのだろう。けれど脱出ができることを知ったフランドールはその上で引きこもったのだろう。大切なものを壊さないように。大切なものを作らないように。

それは会ったことのない姉だったのかもしれないしこれから出会う誰かかもしれない。そして彼女は壊すことを恐れた。

「大丈夫。俺は壊れない。お前のお姉ちゃんも壊れない。お前の大事なものも壊れない。この世界はそう簡単に壊せない。だから君は、フランドールは外に出て笑うべきだ。大事なものを作るべきだ。その強い力で大事なものを守るべきだ。もう何も怖くない」

フランドールは泣いた。嬉しくて泣いた。笑いながら泣いた。それを見て後ろの姉は優しく微笑んでいた。姉妹は笑っていた。

目を開けると見たことのある面子が並んでいた。

「お早う。みなさん」

「二日間寝てたのよ！？ただの人間の分際で何やらかしちゃってるのよあんたは」

いきなり霊夢に怒られたがこれはこれで平和染みていて悪い気はしなかった。そして霊夢の隣に目をやると咲夜さんが微笑んでいた。その手には包帯が巻かれていた。

「手、大丈夫ですか」

「平気ですよ。それより一様の方は？」

「大丈夫です」

ならよかったと相変わらず人を氣遣う完璧なメイドっぷりだった。

そしてその隣に目をやるとじゃれあっている姉妹がいた。

「――この娘を何とかして!!」

「お兄ちゃん!おはよー!」

レミリアに抱きつくフランドール。それを嬉しそうな顔をしながら振り払おうとするレミリア。随分と仲がいいことだ。

このために戦おうとした俺は負傷し二日間寝込むなんていうことになった。正直なところ一番意気込んでいた俺が一番足手まといだった。更にはフランドールを救うことなんて出来ずにフランドールが自らを救っただけだった。結局怪我人になったただだったけれどこの二人の笑顔を見れたのなら安いものだろう。

## 破壊衝動（後書き）

フランドール編終わりました。

次は永遠亭の一を書きたいと思います

## 兎と二トと永遠亭（前書き）

執筆スピードが遅すぎるorz

待っててくれた方々に申し訳ないです。次の章の感覚は掴んでいるのでできるだけ早く書きたいと思います。



## 兎と二トと永遠亭

俺は机の上に山積みされた薬を薬箱へと入れる単純な作業を繰り返す。肉体的には響かない作業ではあるが同じ作業を繰り返すので飽きが来る。精神的には中々辛いものだ。

「何故俺がこんなことをしなきゃならん」

「一さんが無銭の身でありながら治療を受けたからでしょ!!」

隣のうさ耳を生やした女の子、鈴仙の言う通り治療を受けた病院もとい永遠亭で俺が無銭だったことが原因。定食屋なら皿洗いのように、ただ働きをさせられている。それももう三週も経ち大分作業に飽きている。他にも色んなことをさせられるがこの作業が大体の割合を占めている。

「あー、暇だ。鈴仙耳触らせて」

鈴仙は前いた世界の女子高生のブレザーに酷似した服を着ていてなんだか懐かしい。耳を除けば違和感はないのだが耳がない鈴仙なんて鈴仙ではない。というか鈴仙は耳がチャームポイントになっていて可愛い。

「ひゃっ、触らないで！！らめえ」

甘ったるい声を上げる鈴仙。もつといじ、触りたくてなるじゃないか。

「や、やめてください！！」

目に涙を溜めて抗議する鈴仙。今日のところはこれ位にしておいてやろつか。

「まあまあ、期限を悪くするなよ。外の世界の電話見せてやるからよ」

必殺携帯電話。幻想郷は科学技術は皆無と言っていい、その為前の世界にあつた携帯電話などは皆興味をそそられる。

「ホレ」

「携帯電話？」

鈴仙の反応は薄かった。鈴仙ならもつと良い反応をしてくれるかと思っていたのに。物凄く期待を裏切られた。

「反応薄いのな」

「私の所にもありましたから」

「もしかして鈴仙も」

「はい。外ではなくて月からですけど」

ホワッツ？

「て事はおまつ、鈴仙って宇宙人？」

「月の兎です」

「月の兎ってこんなに可愛いのかぁ」

「か、可愛い？／＼／」

顔を真っ赤に染める鈴仙。何があつたのだろうか？

「地上の兎もこんなに可愛ければなあ」

轟と襖が割れる。

「地上の兎に失礼ウサ!!」

中から出てきたのは地上の兎の妖怪、因幡てゐ。イタズラばかり仕掛ける困った奴だ。

「やあ、てゐ。その手に持った偽の薬入れは何かな？」

「は、謀ったな!!」

「掛かりよったなイタズラ兎めが!! 鈴仙! 縄をくれ今夜は兎鍋だ!!」

「可愛いつて言ってくれたノノヘヘ」

肝心の見方の兎は呆けていた。

「さらばウサー!!」

「コラ、待て逃げんな!!」

イタズラ好きな兎に逃げられた。次は何をされるやら。

「鈴仙、イタズラされる前に終わらせよう」

「えへへ」

駄目だ聞いてねえ。

不運なことに鈴仙がおかしくなったために作業の時間が掛かって仕方がない。作業に慣れたと言っても何年も続けているらしい鈴仙の作業スピードに及ばないし鈴仙が居なければ中々作業が進まない。

「あら、まだ終わってなかったの？まあ、良いわ休憩しなさい。こんつめるのは良くないわ」

薬剤の部屋に入ってきたのは永遠亭の中での唯一のドクター八意永林。美しくはびた白銀の髪を腰の所まで縛りながら伸ばしている。素なら足にまで到達するのではと思う。俺を使い走りとして利用す

る張本人である。因みにこの方も女性だ。正直幻想郷に来てから男を見ていない。それどころか幻想郷の女性は皆美少女であつたり美女だつたりするから男の俺としては嬉しいことこの上ないのだがなんとなく心狭い。

「師匠、鈴仙がおかしくなった」

「うどんげが？」

八意永林のことは師匠と呼んでいる。鈴仙が師匠と呼んでいたので便乗して呼んでいる。何より八意さんや、永林さんと呼ぶよりも呼びやすいことからそう呼ぶことにした。因みにこの人は鈴仙のことをうどんげと呼んでいる。鈴仙が永遠亭に来た時に半ば強制的に付けられた名字、優雲華院からきているらしい。本人にうどんげと呼んだところ敢えて無視をされたのを考えるとうどんげと呼ばれるのは嫌らしい。それでも呼び続けるところを見るとどれだけ師匠がサタステイックなお方かとよくわかる。

「うどんげ暇みたいね、新しくお薬を作ってみたのだけれど」

ニタリと師匠は笑う。そして鈴仙は体を震わせるように起こした。

「な、なな何言ってるんですか？バリバリ仕事中ですよ」

異常な速さの作業をする鈴仙。その顔は青くなっていた。

「ふふ、冗談よ。お茶でも飲んで休憩しなさい」

師匠がそう言うのと鈴仙の顔色は戻り強張った体も肩の力を落とし普段通りになった。

「そういえば師匠、今日も組手してもらって平気ですか？」

俺は師匠に武術の稽古を受けている。紅魔館のこともあったし何より幻想郷は人より妖怪の方が多いのだ。師匠曰く鍛えておかないとろくに外出もできないらしい。そもそも師匠は鈴仙と同じように月から来ていて本人が言うには『月の頭脳』と呼ばれブイブイ言わせていたらしい。真相はわからないが。まあとにかく天才にして完璧人間である師匠に武術を教わっている。そんな訳で月で使われている護身術らしいものを一生懸命に練習している。

「ええ、良いわよ。その作業が終わったら竹林に来なさい。相手してあげるわ」

「ありがとうございます」

そんなこんながあつて、今では俺と師匠は晴れて師弟関係である。

「それじゃあ庭で待っているから終わったら声を掛けなさい」

作業を始めようとすると鈴仙が「私がやっておきますから」と気遣ってくれたので遠慮なく庭に向かった。善意は受けとるべきだ。

閑話休題。

竹林の中にひっそりと佇む永遠亭の庭にて俺は師匠とにらめっこをしている。無論遊びではなく、相手がどうするかを伺っている。少なくとも雛っ子の俺には師匠がどうでるかなどわからないが考えることに意味があると師匠は言う。

「行かせて貰うわね」

一瞬の出来事だった。師匠は身体全体のバネを活かし軽めの跳躍。そして身体を捻り蹴りを放つ。その軽そうに見える動きから想像のつかない重い一撃。腕で押さえるものの易々と吹き跳ばされた。

「はっ！！」



更に掛け声と共に回し蹴り。速さだけを追及した追い討ちの技。足場が崩れそうになるが持ちこたえ、返しの拳を放つ。

「甘いわよ」

しかし反逆も無残に押し殺され、ステップと共に回避されてしまう。

「畜生！」

「ふふ、掛かってきなさい」

「うおおおお！」

走り込み師匠との間合いを詰める。そして右腕を引き拳を放つ。今までの修行で身につけた拳は低級〜中級の妖怪なら確実に気絶へ持ち込める程の威力を手に入れている。しかし華奢な師匠の腕に阻まれダメージというダメージを通していない。

「まだまだっ！！」

次は左の拳を放つ。威力は圧倒的に右に劣るが速さは中々のもので不意打ちに使うには持ってこいの代物だ。ただし師匠に不意打ちが

効く筈もなく寸のところで避けられてしまつ。

「中々上手だったわ」

師匠は俺に蹴りを放ちその衝撃で遠距離へ移動。そのまま地面を蹴り、跳躍する。そして俺の頭上で足を振り上げ勢いよく降り下ろす。

「危なっ！！」

必死に回避した後には俺が居た場所にクレーターが出来ていた。殺す気かよ。

人間技でないように思われる師匠の技は霊力という力を使った技で普通では有り得ない威力であつたり男である俺の一撃を受け止めたりにしている。俺も多少は霊力の行使が出来るのだが師匠程巧みに使うことはできない。

「師匠、殺す気ですか？」

「嫌だ。貴方なら死なないわ。頑丈じゃない。それに貴方の拳も普通の女の子なら死んでるわよ」

師匠は普通の女の子じゃないだろう。と心の中で愚痴ってみる。しかしまあ俺も随分と人間離れたものだ。霊力の行使をすればライフルを越えた破壊力に包丁が通るところかへし折れる程の強度の体になってしまうのだ。

「師匠、次は妖怪の女の子も危ない技を使っんで」

「あら楽しみね」

右手に霊力を集中させる。集中させて圧縮する。右手という小さい体のパーツに到底収まらないであろう霊力を圧縮する。師匠との修行を一週間程繰り返し返してわかったことは霊力の扱いがおよそ天才と呼べるレベルだということだ。妖怪退治の専門、博麗の巫女に匹敵するほど、もしくはそれ以上の技術があると師匠は言っていた。俺と博麗の巫女である霊夢にしかできないであろう霊力の超圧縮。多分これでしか師匠と渡り合うことはできない。

「うおおおおお！」

全力で師匠に突進する。0距離になる寸前で弓のように腕を引き持てる力を持って降り下ろす。

「ただの拳じゃ勝てないわよ」

師匠は腕を交差させ拳を受けようとする。けれど俺の放った拳は止まらない。止まる筈がない。

これは必殺なのだから。

轟音と共に地面が破裂する。真正面で喰らう筈だった師匠は何処かへ消え、代わりに地面を完膚なきまでに砕かせた。

「危なかったわ」

全く危ないといった雰囲気を感じさせない口調の師匠が俺の後ろに居た。

「どうやって避けたんですか？」

「内緒よ」

「ああ、また負けか」

鋭い手刀が首を捉えたのと同時に意識は闇の中に墜ちた。

「また負けたみたいね」

目を開けるとニタニタと笑う少女が目に入る。整った顔立ち、絹のように艶のある黒髪。絶世の美少女と言われて否定できない。それどころか彼女こそが絶世の美少女なんだと確信が持てる。

それもその筈だろう。彼女は数々の俺を虜にした蓬莱山輝夜。すなわちかぐや姫なのだから。名前と経歴を聞いた時は心底驚いた。しかし彼女の美貌の前に否定する理由は何一つなかった。寧ろ当然のようにも思えた。

閑話休題。

月に帰る筈だった輝夜が何故未だに地球にいるかというところから逃げ出し追われている身なのだそう。よって地球の中でも幻想ではない幻想郷に逃げ込んだらしい。その中でも更に場所を知り尽くした者でなければまともに探知することもできない迷いの竹林にひっそりと永遠亭を建てたそう。病院として機能している理由は管理人である八雲紫さんに伝えた表向きの理由らしい。そもそも迷いの竹林の中にある病院など中々来ようとは思わないだろう。

「ああ、また負けたよ。今度こそは勝てると思ったのに」

「勝てなくて当たり前よ。永林は天才なんだから。あんたみたいな偏った天才と違って万能な天才だから勝てなくて当然よ」

「そうかい。けど、どんな万能でも暇は持て余すんだろ？」

「不死とは酷なものね」

蓬萊山輝夜、八意永林、この二人は不死身である。正真正銘の。よってどんなにこの世界に絶望しようとも生き続けなくてはならない。殺されることすら敵わない。

「お前も暇なんだろう？」

「そりゃそうよ。まあ、あんたが来てからは退屈しないで済んでるわ。感謝する」

師匠が俺の修行をしてきているのも退屈しのぎなのかもしれない。それでも自分が人のためになっているというのは中々嬉しいものだ。

「人里にでも出ればどうだ？退屈しないと思うぜ」

「嫌だわ。そんなんで月の連中に捕まってただでさえ退屈なのに牢屋にでも入れられたら不死なのに死んでしまうわよ。まあ、人としては死んでいるんだろうけどね」

嗚呼、こういう輝夜の表情に男達は虜になったのかもしれないな。そう思えた彼女の表情は儚げで触れたら壊れそうな神秘的な美しさを持っていた。

「お前は生きてるじゃないか」

「まあ、その通りね。そろそろ晩御飯の時間ね。食卓に行きましょう」

## 兎と二トと永遠亭（後書き）

取り敢えずこの章で永林と輝夜についてスポットを当てたかったです

うどんげは萌え要員



## 復讐は紅蓮（前書き）

前回に比べて早く更新できたと思います。

これからも更新スピードをできるだけ早くするのでよろしく願い  
いたします。

## 復讐は紅蓮

鳥の鳴き声ではなく兎の泣き声で目が覚めた。

鈴仙が泣いていた。その隣では師匠が鈴仙を撫でながら険しい表情をしながら庭を見ていた。

「何があつたんだよ鈴仙」

「ひつく、え、永遠亭がつ！」

師匠は黙って庭を指さす。異常だった。

庭は何ともない。なんら変わりの物淋しい庭だった。しかしその奥の竹林が違った。赤だった。綺麗な紅だった。怖いくらい朱だった。竹林は紅蓮に燃えていた。永遠亭は紅蓮に囲まれていた。

「誰がこんなことをっ」

「わからないわ。これから調べる。もしかすると月の追っ手かもね。けれど私には違う何かを感じるのよね」

「なんでですか？」

「彼らが自ら望んで幻想郷を荒らそうとは到底思えない。退治される可能性だってあるのだから」

「となると」

「ええ、益々わからないのよ。私達は長年引きこもったニート集団なのだから恨みを買うことはしようにも出来ないのだけれど。それに私達が人里に居た期間は何百年も前の話よ」

恨みを買ったとてその人は既に死んでいる。じゃあ、だとすればなんなんだ。

「随分と騒がしいじゃないの」

普段はだらしない輝夜が余裕を持った実に高貴な雰囲気を漂わせて俺達の居る茶の間へやってくる。こういうところと顔を見なければ彼女をかくや姫だなんて信じられないだろう。

「輝夜、外」

「誰がやってくれたのかしら」

「白い髪をした奴が火を放つのを見たウサ！」

突如庭の辺りから衣服を焦がしたてゐが出てきた。あの火災でも無事だったのは流石妖怪といったところか。

「良かった。てゐ無事だったんだな」

抱き締めて撫でてやる。するとくすぐったそうにしながら離れていった。

「きゅ、急に何するウサ！」

「あー、悪い悪い。まあ兎に角全員無事だな」

「ええそうみたいね」

師匠は全員を見渡して言った。

「とにかく白い髪をした放火魔を探さねえと」

でないと被害は増えるかもしれない。永遠亭も無事でいれる保証はないのだ。

「その必要はねえよ」

燃え上がる竹林の奥から人が出てきた。紅い、紅蓮の炎の中から白い髪をした人が出てきた。中に入ってしまったら燃やし尽くされるであろう炎の中からひ弱そうな、軟弱そうな白が飛び出てきた。けれど病的な白色の髪の持ち主は火如きでは到底燃やせそうにない強さを持っているように感じられた。いや、彼女は強いのだろう。

放火魔の正体は白い髪の女だった。

「なんでこんなことじゃがった！」

「さてね」

女は笑う。ニタニタと不気味に笑った。俺はそれが心底怖くて仕方がなかった。足は自然と後ろへ下がりが構えた拳もダラリと下がった。

不気味に笑った女は紅の目を見開き言った。

「私は藤原妹紅だ。お前らを潰しに来た」

その場の全員が臨戦体制を取った。

「まあ、寝てろ」

速いなんてもんじゃない。語ることすら既に遅い。一瞬の間に近付いた妹紅は俺の腹に掌底を打ち込んだ。

「ぐおっ！！！」

霊力すら纏っていない体への攻撃はかなり堪えた。胃が潰れてしまつかと一時は本気で思った。

「かあぐうやあ姫ええええええ！！！」

力任せの拳が輝夜を襲う。

「輝夜っ！！！」

輝夜は横に向かって数mぶっ飛んでいった。

「てめえ!!」

「なんだよ。5対1だろ少しは楽しませろよ? あア?」

「それもそうね」

瞬時に師匠と鈴仙が妹紅へ飛び掛かる。師匠は右を鈴仙は左を狙い拳を放つ。

「遅えなあ。本当に遅えよ。その程度なら散つとけ」

左右の二人に向け妹紅は腕を大きく広げる。まるで蠅を払うように二人を飛ばす。鈴仙の実力はわからないにしろ師匠の実力はかなり高かった。そんな師匠すらを片手で。しかも抑えるどころか退けるなんて。

「藤原妹紅おおおお!!」

「だからよお!!」

手を組。礫を作り、降り下ろす。

「遅え言ってんだろっが!!」

怒ったように妹紅は振るった。力任せ意外のなんでもない、ただの拳骨は俺の頭上を突き頭蓋骨を破壊しようとする。

「ぐがぁあああぁいあああ!!!!」

痛い。今までの痛みという痛みが嘘かのような痛みが頭から全身に向けて駆け巡る。

「かぐや姫は死んでねえよなあ? いや死ぬ筈が無えか」

こいつ! 藤原妹紅は輝夜のことを知っている。いや、それどころか輝夜のことを狙ってる。輝夜が危ない。

「ぶっ飛べ!!」

背を見せた藤原妹紅へ向けて靈力を圧縮した拳を放つ。無論、咄嗟の行動のこの拳には藤原妹紅の意識を奪う力は存在しない。それで



も藤原妹紅の体は数m飛ばす程の力があった。妹紅は大胆に転がりながら襖を突き破りようやく着地した。

「あー痛。悪い見くびってた。峰打ちのつもりだったんだけどなあ。まあ取り敢えず本気出す」

「伊井一。喧嘩だ藤原妹紅」

「はは、気に入った。ぶっ潰してやるよ」

瞬時に移動した妹紅は長い脚を利用し回し蹴りをする。それを霊力を込めた腕で受け止めるがそれを予想していたかのように時間差でもう片方の脚が飛んでくる。

「ぐっ!!」

藤原妹紅は攻撃を止めない。空中で一回転しながら回し蹴りを放つという離れ技を決めた後は大きくしゃがみ込み腹目掛けて掌底を放つ。あの技はまずいと身体中が危険信号をあげる。

「糞つたれ!!」

足場を崩しながらなんとか回避。しかし藤原妹紅はニタリと笑いしやがんだ状態から飛び上がり足を降り下ろす。俺の考えなどお見通

しだった。あれはまずい。しかし足場を崩した俺に成す術はない。

轟音。永遠亭の床が砕け散り木っ端を巻き上げた。けれどもその攻撃は俺に掠りもしなかった。

「当たってねえだど？」

何が起こったんだ。しかし考える間もなく何処からか現れた師匠が床に出来た穴で阿呆面をしている妹紅に踵落としを放つ。妹紅とは違い確実に命中したそれはボキリという嫌な音を立てつつ床の穴を更に広げた。

「ぐあっ！！！」

妹紅の鈍い悲鳴が聞こえる。

「お前じゃないな。違う。あの兎か！！！」

その後妹紅は鳥のように飛び上がり永遠亭の部屋という部屋をぶち破っていく。

「見つけた。この現象の犯人を」

妹紅が指差したのは妹紅の一撃でぶっ飛んだ鈴仙だった。

「バレちゃいましたか。案外知的なんですね」

鈴仙の目が紅い。妹紅の炎の紅とは違う紅色。あの紅は狂気だ。深くて濃くて冷たい紅。危険を訴えるレッドゾーンだ。

「知ってます？ 兎の目は紅いんですよ」

鈴仙はニコリと笑った。

「私としたことが嵌められていた訳か」

「私の能力は狂気を操る程度の能力。貴方はあの時私の目を見た筈です。それでもう幻術は完成しています」

「なんともまあ、怖い能力だ」

けれど、と妹紅は続けた。

「その程度で力の差が埋まるとでも思ってるのか？」

嗚呼、天才である師匠が妹紅に勝てない理由がわかった。妹紅は手練れ（プロ）だそれに対して師匠は天才であるうと所詮素人。<sup>アマチュア</sup> 戦闘経験の差がここ出る。

やはり藤原妹紅は強い。

「そんじゃ、遠慮なく行かせてもらっ」

藤原妹紅は間合いを詰め蹴りを横薙ぎに放つ。狙いを絞らない攻撃ならばクリーンヒットはできないものの当てることはできる。先程の踵落としのようににはならない。

「貴方がいくら強くてもハンディが付けば怖くてはないわ」

師匠が蹴りの間に入り裏拳を撃ち込む。そのキレのある動きは流石天才と言ったところだ。しかし妹紅は軽々と受け身を取るとそこから助走を付け、師匠の元へと飛び込み拳を放つ。勿論前回の教訓を得ている妹紅が放った先は師匠ではなかった。拳は床を砕き木っ端は師匠へと礫の如く突き刺さる。

「なっ！」

更に木っ端は目眩ましともなり師匠の視界を奪ったそのまま妹紅は師匠に近付き横一閃に裏拳を放つ。

「させるかよっ!!」

「させませんよ」

足に靈力を溜め、瞬時に妹紅の元へと移動して拳を放つ。鈴仙は後ろから妖力弾を放つ。それを妹紅は軽やかに避ける。しかし彼女の目的である最大戦力であるう師匠を潰すことは叶わなかった。

「鬱陶しい。まずはお前から潰すか」

妹紅は俺の元へと駆け出し拳を振るう。けれどこの動きは読めていた。足を前に突きだしカウンターを妹紅の腹へ放つ。足と腕のリーチの差で妹紅は自然と地へ落とされる。

「捕まえた」

ガシリと足を捕まれた。藤原妹紅は幻術に掛かりながら俺の足を掴んだのだ。

「蹴り喰らえばよお、流石に距離くらいわかるよなあ」

ダメージすら計算し尽くされていた。喰らった攻撃から俺との距離を逆算して束縛することに成功した。

「まず一人!!」

「一さんすいません!!回転式ーリボルバーー」

刹那。俺すらを巻き込む鈴仙の弾幕。妖力弾は俺と妹紅の距離を放してくれた。

「すいません咄嗟のことで」

「助かったよ鈴仙」

やがて妹紅も立ち上がり鈴仙を見詰める。

「やっぱりまずはお前からだ」

妹紅は走り込み鈴仙に向け横一線に拳を反動で返った拳で斜めに裏拳を放った。凄まじい音がした。

「取り敢えず幻術は潰れた。さあ、どうする？」

挑戦的に妹紅は言った。

「師匠っ！！」

「大丈夫、気絶してるだけ」

安心したのが自分でも良くわかった。肩の力が抜けていく。

「隙有りつてのは、このことだよなア！」

ドスンと重たい一撃が顔面を捉えた。景色が2、3回転し気づけば天井を見上げていた。

「っ！やられっぱなしで堪るかよ！！」

猛ダッシュで駆け出し右腕を引き抜く。力任せの一撃は易々と受け

止められた。

「余所見は禁物よ」

両手が塞がった妹紅に向けて師匠が一撃を放つ両手を使つての掌底。両手を花みたいに広げて、靈力を放つ大技。

「掌波、董」

轟、と爆音がした。妹紅の体は庭へと吹き飛ばされる。庭なら放てる。永遠亭を壊すことなく放てる。

靈力を右拳に溜める。そして圧縮。圧縮して超密度になった靈力を纏った右手を振りかざし庭にいる妹紅へ向けて放つ。庭が沈没した。

「がつぐああああああ！！！」

妹紅が悲鳴を上げる。いくら強かろうともつ立てない。

やがて悲鳴が途絶える。そして輝夜が驚愕を浮かべた顔でこちらへ駆けてくる。



「輝夜、なんとか終わった」

驚愕を浮かべた輝夜は首を横に振る。

「違うの」

「え？」

「藤原姓。 やっと思い出した。 あの時<sup>の</sup>っ！！」

言葉は続かなかった。 早急までぶっ潰れていた妹紅が立ち上がった。 肩は変な方向へずれ、 腹から血を流して瀕死の妹紅が立ち上がった。

「やっと思い出したか。 遅えんだよ」

しかし傷はみるみる内に回復していく。

「貴方やはり」

「そうさ、蓬萊<sup>ふじみ</sup>人さ。 ちよいと話そうか蓬萊<sup>どうし</sup>人達」

妹紅は悲しそうな目をしながら言った。

## 復讐は紅蓮（後書き）

妹紅の登場を衝撃的にしようとした結果こうなってしまった。

次は妹紅の回想なので短い章になると思います。

できればいいので感想ください！！いただけると嬉しいです

## 黒髪の少女（前書き）

短い章なのに更新速度が凄く遅かった。改めて自分の技術の低さを実感しました。

次は出来るだけ早く更新したいです

## 黒髪の少女

これは昔話だ。物語りから外れた脇役の昔話だ。

「父上っ」

黒髪の少女が父親らしき人物の背に飛び乗る。

「痛っ！妹紅、加減を知りなさい」

「うめんなさい」

「よく言えた。流石私の娘だな」

わしゃわしゃと黒髪の愛娘を撫でる父親。

幸せそうな、幸せな親子の1コマだった。この親子の笑顔が途絶えることなどないと思えた。恐らく本人達も思っていただろう。

「父上、月見団子作ったよ」

「よくできているじゃないか。流石私の娘だな」

流石私の娘だな。が口癖の妹紅の父親である男には妻がいなかった。妹紅の母親でありこの男の妻である人間は妹紅を産んだ直後に病で倒れてしまった。男はその分娘を愛した。

そんな男は恋をしたのだった。

都に実に美しい姫が居る。そんな噂が立ったのはいつ頃だろうか。妹紅の父親である男はそんな噂に興味を示さなかった。しかし都に寄る用事が出来、もののついでに姫を見に行った。

それはそれは美しい姫だった。けれど男が恋に落ちるものではなかった。元々男は妻を愛して止まない人間であつた故に他の女性に対し外見だけで惚れたりするようなことはなかった。

「案外退屈なものね」

しかし、そう呟いた姫の儚げな顔は時折見せる妻の顔にそっくりだった。憂鬱に語りかけ退屈そうに自虐する。世界の全部を知っている物語を読み終えたように世界に飽きる。男の妻もそんな人間だった。そんな姫を見て男は恋に落ちた。

それからというもの、何の因果か男は都で働くことが多くなった。藤原姓も気づけば一流貴族であり帝の側である都に良く行くようになった。その度に姫を口説いた。しかし中々姫も難攻不落の鉄壁であつた。

「妹紅」

「なあに父上？」

妹紅の父親である男は決意を固めるように言った。

「新しいお母さんが出来るかもしれない」

「本当？やつた」

母親の居ない妹紅は素直に喜んだ。それを見て男も決めた。あの姫を妻にしようと、娘の母親にしようと。

そして父親はその日の内に家を空け姫の元へと向かった。今までとは違う真剣な表情で。

「輝夜よ話がある」

いつもと違う表情に輝夜も気付く。いつもなら軽くあしらってきたが今は違う。そんなことは出来ない。男の目は戦を前にした戦士の目のように見えた。そんな男の表情を見て輝夜も何時ものような扱いはしなかった。

「私の妻になつてほしい」

今までこの男に口説かれてきた輝夜だがこうはつきりと面と向かって求婚されるのは初めてであった。

けれどそんな真剣な男の表情は輝夜の心を動かすに至らなかった。男に輝夜の世界を変える程の力はなかった。

「そうね。燕の産んだ子安貝でも持つてきたら考えてあげるわ」

「そうかい。そりゃ難題だ。帝だってそんな難題出さんぞ」

輝夜に必要以上に言い寄るのは男だけではなかった。他にも四人程



求婚する者が居た。その者達にも難題を出したが偽造したものを持ってきては振られていった。

「それじゃあ次会う時は燕の産んだ子安貝とやらを持ってくる」

それっきり男は来なくなった。事が起きたのはそれから一年と二月ほど経った時だった。

「輝夜、手紙が来たぞ。先程藤原の所から使いが来おった」

最早親である翁が短い紙が纏められた手紙を寄越しにきた。藤原という姓を久し振りに聞く。あれ以来聞かなくなったと思ったたら急に手紙を寄越すのだから不思議なものだ。

手紙を開く。最初中身に書いてある内容は最低限の礼儀が連ねられている文で読んでいても仕方がない。本文に目を移すと先程の長つたらしい文が嘘かのように単調に纏められていた。

殿が危篤になられた。

と単純に纏められていた。

嗚呼、あの男がか。と輝夜は思った。これといった悲しみなんてない。ただなんともいえない損失感があつた。

「危篤と聞いたから来てみたら案外元気じゃない」

男は布団から上半身を起こし輝夜を待っていた。しかし顔色は悪く一年前と比べ痩せこけていた。

「まあ、そう言っなよかぐや姫や。そろそろ死んじまうんだ多少の我儘は聞いてもらうかね」

「勝手にしなさいよ」

相変わらず素っ気なく応える輝夜。

「いやあ、御前さんの言う燕の産んだ子安貝、絶世の宝なんだろうなあ。全然見当たらん。使いに頼んで探しても全然見当たらん、自分で探しても見たが糞を掴んで腰を打ちまともに歩けなくなる始末。その後から病にかかりこの有り様だ」

「貝なし（甲斐なし）」

「嫌いじゃないなそういう洒落は。まあいいや、よう此処まで来てくれた。まあそれが唯一の甲斐だな。さてと、その娘と二人きりにしてほしい」

もう力尽きることは容易に想像できるような顔色をしていた。

「呼ぶだけ呼んでおいて」

「我儘くらい聞いてくれと言ったらうに」

「勿論早急に立ち去るわよ。流行り病だったらどうするのよ」

「妹紅、多分私はそろそろ死ぬ」

「嫌だよ。嫌だよお」

泣いているのか掠れた声で妹紅は言った。

「人の命は短くて呆氣ない。いつか妹紅もそれをわかる時が来る」

父親の言葉に耳を傾け妹紅は涙を堪えた。

「いやあ、それにしても人生は素晴らしい。母さんにも出会えたし妹紅にも出会えた。それにかぐや姫にも出会えた。きっと私は世界一の幸せ者だろうよ。そうだ妹紅、恋を試してみる。人生を変える位の恋を試してみる。私みたいに呆氣なく振られることだってあるがそれでも恋は素晴らしい。私がこうして恋をきっかけに死んだからと言って恐れるな。恋とは人を殺すことも出来れば反対に人を生かすことができる。そんな恋を試してみる」

言いたいことを大半言い終えたのか男は咳き込み始めた。

「最後に妹紅よ」

「世界で一番お前を愛していた」

男は息を引き取り少女は咆哮のように泣いた。

少女は憎しみを抱いた。誰にという訳ではない。もしかしたらかぐや姫かもしれないし早くに死んでいった父親かもしれないし父親の死を受け入れられない自分かもしれない。そんなもやもやとしたやり場のない怒りが、憎しみが少女の中で渦巻いていた。

そんな少女はかぐや姫が月に帰ったことを知る。それと同時に帝に贈られた蓬萊の薬。つまりは不死の薬の存在も知ったのだった。

そして何を思ったのか少女は富士山にて蓬萊の薬を運んでいた帝の使いから蓬萊の薬を奪いそして飲み込んだ。少女は不死身になった。

「それと同時に私の髪は化け物みたいな白になった」

妹紅は辛そうな表情をしながら自分の髪を触る。

「あら、そう。その話に私は関係ないわ」

キツパリと輝夜は言い放つ。けれどそれは正論でしかなく俺達は何

も言えない。今の妹紅がやっていることは子供みたいな我儘で自分勝手な八つ当たりだ。

「けるな。ふざけるなっ！！」

妹紅の背には真っ赤な羽根。真紅の羽根が炎の羽根が広がり燃え盛る。

不死鳥が飛び立った。

## 黒髪の少女（後書き）

次の章でラストバトルです。

応援をお願いします

## 不死鳥の涙（前書き）

長い章にする筈がやたら短い章になってしまったorz

取り敢えず妹紅編最終章です



## 不死鳥の涙

燃え盛る炎を纏った妹紅はまるで不死鳥であつた。煌めく炎は美しく見る者の心を溶かしていく。触れれば溶ける炎。そんな炎を妹紅は振りかざす。

「関係無エだと？ふざけるなっ！！私がどれだけ辛かったのかわかるか！！御前にわかるのか？なあかぐや姫さんよお！！」

「わかるわけないじゃない。それに被害者面は見苦しいわ。まるで駄々を捏ねる子供よ」

この輝夜の言葉で妹紅のリミッターは完全に外れた。今まで炎を使わなかったのも永遠亭を燃やさないように、という戦闘においての 인간의觀念。エゴ。けれどそんなもの今の妹紅にはない。怒りで我を忘れ破壊行動を繰り返す。これを見て率直に思った。思ってしまった。あるいは思わざるを得ない。

あんなの、

ただの化物じゃないか。

妹紅は自分を化物と蔑んだ。哀しそうにしながら、自らの白くなっ

た髪を触りながらまるで化物だとそう言っていた。

じゃあこのままでは彼女は本当に化物になってしまふ。それじゃああまりにも可哀想だ。

「止まれ妹紅ッ！！」

「黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れッ！！」

一瞬だった。羽根が生えたのかと思った。ロケットに衝突したのかと思った。そう思える程に俺の体は猛スピードでミサイルみたいに宙へと吹き飛ばされていた。

「ぐはっ！！」

「御前に何がわかる！！」

何発も何発も殴打される。霊力でガードの姿勢を取るものの上手くいかない。それでも妹紅の拳はマシンガンみたいに連続して動きを止めない。そして咆哮を上げながら大きく大きく腕を振りかぶる。必殺。あれは危ないと容易にわかった。けれど隙が大き過ぎる。

逆にコンパクトに放った俺の拳は妹紅の顔面を捉える。そしてコンパクトで爆発的な霊力を撃ち込む。妹紅の羽根は消えた。

「なんで私の邪魔をするッ！！あいつは輝夜は不死身なんだ百回死んでも死なないんだぞ」

「そんなことじゃあ、何も解決しない。そんな終わり方は認めない」

「邪魔するなああああ！！」

悲鳴を上げながら突進してく妹紅はこれでもかという位に弱かった。ひ弱だった。脆かった。雛鳥みたいに弱いそれを抱き締めて子供のままの妹紅に語りかける。

「辛かったただけなんだろう？」

妹紅は何も言わない。

「胸が張り裂ける程辛かったんだろ？」

妹紅は何も言わない。

「ただこうして慰めてほしかっただけなんだろ」

もう疑問符はつかなかった。確信だったし確実だった。

「なんでっ」

掠れた声で妹紅は続けた。

「なんで誰も気付いてくれないんだよぉ」

子供みたいにうわんうわんと泣いている妹紅はやっと正直に言えた。輝夜はこつちを向いてウインクをする。全くもって見透かした人間だと俺は思う。わざわざ自らを危険に晒してまで妹紅を挑発し感情的にさせた。感情が表に出ている妹紅を見ていれば明らかだった。ただの子供でしかなかった。そんな妹紅を最初から知っていたのか輝夜は異常なまでの挑発をした。それが効果的だったのか妹紅はただただ俺の腕の中で正直に一つ一つ事を解決させていく。それでも戦いは終わっていない。

「私、誰に当たることもし、出来なくてっ」

泣きすぎて途切れ途切れになる言葉ながらも妹紅は続けた。

「悔しくてっ、けど輝夜のっ、名前を聞いてっ、私っ、」

殺そうと思ったと妹紅は言った。しかしそれすら、親の敵と思っていた人物にすら当たることが出来ない妹紅は知った。

「私っ、どうすればいい」

「まだ終わってないだろう。俺と御前の喧嘩。続きをしよう。今までの分を俺に当てる」

「それで全部終わりにしよう」

「うあああああああ！！悲しかった！！」

轟音と共に決まる拳。俺は受け止める。

「辛かった！！」

それも受け止める。

「怖かった！！苦しかった！！」

受け止める。

「怒りたかった！！泣きたかった！！笑いたかった！！」

受け止める。

「受け止めてほしかった！！！」

受け止める。そして受け入れる。そして父親の死んだ少女で止まっていた妹紅の時間が動き出す。秒針が回り始める。千年近く錆び付いていた時計の針は遅いながらもしっかりと時を刻む。これから始まりだ。

「次は俺の番だ。これは永遠亭の分」

左フックが鋭く決まる。

「それに、輝夜と師匠と鈴仙とてゐと竹の分だ！！」

右拳が決まる。全力で放ったそれは妹紅は吹きとばし、反動でボロボロだった俺の意識を刈り取った。

俺が目覚めたのは全てが終わってから三日経った後の朝だった。

「貴方は三日間寝ないとまともに動けないのかしら」

師匠が茶化すような口調で言う。確かに紅魔館の時と同じだ。

「ネタが少ないウサ」

「ネタじゃないぞてゐ。まるでウケ狙って倒れたみたいに言うな」

全くもって失礼な奴だ。何故かその隣に半泣きの鈴仙が居た。

「み、三日間も寝てるから心配したんですよ」

「悪い。心配かけて」

いつも通りの鈴仙といった感じがしてなんとも落ち着いていた。

「師匠あの二人は？」

「ああ、あの娘たち？庭で喧嘩してるわよ。見てくる？」

「そうさせてもらいます」

「死ね輝夜あ！！」

全力で振るわれる拳。

「当たらないわよ。も・こ・た・ん」

「てめええええ！！」



「やあお早う二人共、随分と仲の良いことで」

「どこを見てそう言ってるんだ（のかしら）」

声を合わせてしまうそこだと言いそうになったが面倒なので止めた。喧嘩する程なんたらとは本当だった。

「それにしても一は三日寝るのが好きみたいね」

「五月蠅え。師匠にも言われた所だ」

「ひ、一、この間はあるがとな」

モジモジしながら頬を赤らめて言う妹紅は自然と頬を緩ませた。

「それと、私もこ、恋をすることにした。父上に負けないくらいの恋をしようと思ってる」

「もこたんがデレた!」

「もこたんじゃない！！デレてない！！」

「頑張れよ妹紅」

「え？あ、うん」

長そつで短かった物語は終わった。結果として竹林全焼、永遠亭半壊という不様な結果に終わったがまあ有りだろうと俺は思ってしまった。

「ーさんお客様です。玄関の前にいらしてます」

鈴仙がパタパタと可愛い足音を立てながら俺を呼ぶ。

「わかった直ぐ行く」

それでも有りだと思えたのは、いつも通りの永遠亭だったからだろう。

## 不死鳥の涙（後書き）

妹紅フラグが立ちました

これから色々と立つんではないでしょうか？だって主人公だもの。  
補正だもの。

さてメインヒロインは誰になるやら。メインヒロインが決まったら  
皆さんの意見によって ルートみたいのをやりたいと思います

## 悪魔の従者（前書き）

前回に比べてやたら遅い。新しい章を作るのが苦手で……

短い、低クオリティーという内容ですが読んでいただけたら幸いです

## 悪魔の従者

「これまた珍しいお客さんだ。お早うございます咲夜さん」

「お早うございますーさん」

どういうことがあつてか咲夜さんが最早半分我家と化している永遠亭に訪れた。客と聞いててつきり霊夢やレミリア辺りかと思っていたが不思議なことに咲夜さんだけであった。側にレミリアやフランドールが居ないか探したが居なかった。咲夜さん一人とは本当に珍しい。

「そんなに不思議めいた顔をしないでください。ただのお見舞いです」

フルーツの入ったバスケットを渡される。そういえば今は秋だったな。沢山の果物が美味しそうにバスケットの中で咲いていた。

「わざわざありがとうございます。どうぞ上がってください」

「それでは失礼します」

ちよこんと咲夜さんが俺の隣に座る。こうして隣に座っている咲夜さんを見ると女の子だなと思う。艶のある白銀の髪、吸血鬼であるレミリアの隣に居ても色褪せないであろう白い肌。大きな瞳。どちらかというところ綺麗より可愛いの種類に入るのではと観点を見直せられる。

「どうなさったのですか？そんなにじーっと見て。別に構わないのですが、その恥ずかしいです」

頬を赤らめる咲夜さんは可愛らしかった。

「すみません」

「お茶ですよ」

鈴仙が俺の前にお茶を置き。咲夜さんにもお茶を置いた。何故かやたら乱暴に。

「それではごゆっくりと」

鈴仙はゆっくりしてほしいと言った人間が到底しないであろう青筋を浮かべた作り笑いをして去っていった。さてはてめに悪戯をされたな。

「美味しいですね。たまには緑茶も良いです」

「それは良かった」

咲夜さんのお茶を飲む仕草から何まで美しく感動してしまう。

「あー手が滑ったー」

庭の妹紅が全力で振りかぶり石の礮を投げる。棒読みマシのそれは目が全力だった。絶対手が滑っていないであろうその礮は咲夜さん一直線に向かって飛んでいった。

「危ないッ」

俺は咲夜さんに覆い被さる形で盾になる。猛スピードで飛んできた礮は俺の頭に直撃するが靈力を集中させ異常なまでの石頭になっていたため礮の方が砕けていった。

「咲夜さん大丈夫!？」

咲夜さんの盾となろうとした俺は必然的に咲夜さんを押し倒す形になっていた。咲夜さんの綺麗な太ももが俺の足と交差されていて、

かなり官能的であるというのに咲夜さんと俺の顔は鼻先5cmの距離だった。咲夜さんの息が鼻に掛かる。

まさに薔薇色の空間ーエロモードー。

咲夜さんの顔が真っ赤に染まる。咲夜さんの太ももが微かに動く。俺の格好が浴衣のため咲夜さんの柔らかい太ももを直に感じる。感度は良好、理性は限界。

「んっ」

目を瞑る咲夜さん。もうゴールしていいかと息子。体力の限界と理性。

「ーいつきまあ」

咲夜さんに向け手を伸ばそうとした俺の顔面に一撃が入る。そこには顔を真っ赤にした妹紅と鈴仙。

「何やろうとしてた？（んですか）」

意識はここで途絶えた。



「お早うございますーさん」

「お早うございます咲夜さん。なんででしょう居間に上がった辺りの記憶がないんですが」

思い出さないでいいですと咲夜さん。そうですねと俺。

「そうだ咲夜さん。話聞かせてくださいよ。吸血鬼ハンターである貴方が吸血鬼の従者になった理由を」

「もうバレてしまいましたか。元よりそのつもりだったのですよ。いつ頃から気付いてましたか？」

「いや、この事についてかどうかなんてわからなかったんですけどレミリアが居ないというところで単純に予想しただけです。確信を持つまでには至ってませんでした」

「そうですね。勘が鋭いんですね」

「そんな事より」

「わかってます。今から話します」

あれは私がという形で咲夜さんは昔話を語り始めた。

人と妖怪の共存など夢のまた夢。

妖怪は人を喰い、人はまたそれを退治する。その良い例が妖怪退治の専門である博麗の巫女だ。そんな人間と妖怪の線の置かれた関係が激しい集落や村も少ないながらも存在した。十六夜咲夜はそんな村に生まれた。彼女の村は妖怪をというよりも吸血鬼という種類を恐れ、恨み、退治しようとしていた。最早、その村では吸血鬼は悪の存在というのが常識だった。そういった教育もされてきたし、何ら違和感はなかった。そんな十六夜咲夜は運動神経に恵まれていた。彼女は吸血鬼ハンターにならないかと村の者に誘われたのだった。

即決したのだった。

村のために吸血鬼ハンターになる、と。そんな彼女は異例の16歳で吸血鬼ハンターになった。元より優れていた運動神経に加え類い稀なる才能で幾多の吸血鬼を狩りとっていった。

吸血鬼が苦手とする銀を施した投げナイフを用いた戦闘スタイルは彼女特有でありながら、人間の筋力などでは測ることの出来ない力を持った吸血鬼において最も効率的で効果的な戦いだった。

神童とまで呼ばれていた。そんな彼女を変える戦が起きたのだった。

「今日は大事な仕事だ。気を抜いたら此方の命が散るだろう」

咲夜達を率いている吸血鬼ハンターのリーダーとして動いている男が余裕のない表情をしながら言う。この男らしくないと咲夜は思った。しかしそれもその筈だ。今夜咲夜達のチームは最強の吸血鬼スカーレット家と戦うことになっていたのだから。

吸血鬼の中でも群を抜く破壊力。そして今まで挑んだ吸血鬼ハンターを一人残さず潰していった経歴。魔法を扱い、神の槍を用いた闘いをする。

最早、吸血鬼としてではなくスカーレットデビルと呼ばれたその一家。悪魔の身でありながら神の槍を行使する。異例中の異例。最強、その言葉が相応しい。そんなスカーレット一族に挑む吸血鬼ハンターはもう百年居ないという。そんな一族に咲夜達のチームが向かうのもまた咲夜達のチームがずば抜けていたからだ。

たった四人のチーム。そんな少数人数のチームが歴史上最も吸血鬼を狩ってきたのだ。咲夜達のチームもまた最強。故に百年の期間、まるで封印されるかのように凍結していたスカーレットデビルとの戦闘を再び始めたのだ。

『人』の平和のため。

チーム全員が紅魔館に侵入して30分が経つ。おかしい。直感で咲夜は思った。今までなら屋敷に侵入した瞬間からもしくは屋敷に入る前から屋敷の主である吸血鬼は出てきていた。それが今回は違った。しかし今回の戦いがまた例外的であるが故に疑問を浮かべたもののまたそれを自分で納得させた。

例外に対する戦いは例外であっても不思議はないと。

仲間と共に部屋という部屋を探す。その作業を繰り返している内に咲夜は一つの部屋を開けた。

そこには痩せ細った少女が虚ろな目をしながら部屋の隅に座り込んでいた。

「大丈夫!？」

駆け寄ろうとした咲夜の肩をリーダーである男は掴む。

「あれは吸血鬼だ。容易に近付くな。それは遠距離戦を得意とするお前が一番知っている筈だ」

その通りだ。どんなに痩せこけていようが相手は最強の妖怪である吸血鬼。最上位に位置する妖怪。隙を見せたら何をされるかわからない。そんな事はわかっていた。

けれど痩せこけた少女に敵意を向けることができなかった。寧ろ同情の念すら抱いていた。

咲夜はそんな自分の感情に気付いた。酷い頭痛がした。

「お姉ちゃん、助けて」

吸血鬼は咲夜に向け、咲夜だけに向け、掠れた声で助けを求めた。

「スカーレット家に居るのはあの吸血鬼だけらしい。成る程、それならあの異変にも納得する。さて今回は簡単な仕事だったな」

リーダーである男は懷から十字架を取り出す。吸血鬼に対して絶対的殺傷力を持つ武器。

咲夜は思った。あんな娘でさえ傷つけなければならぬのかと。今までそんな疑問は抱かなかった。ただ単に男のようにどんな輩であろうと吸血鬼なら討つ、そう思っていた。実際そうしてきた。そんな咲夜は初めて自分のしてきた行動に疑問を覚えた。

今までしてきた事は自分勝手な思考に基づいた、ただの殺人であると思うことさえできた。ただ相手が吸血鬼であったというだけでそんな考えさえあれば自分は人を殺したかもしれない。いや、悪と判断したならば殺しただろう。

冷汗が止まらなかった。

自分には人殺しの素質があると知ってしまった。歴史に残る程の殺人のセンスが自分にはあった。考えただけで動悸がした。

「さて終わらせよう」

男が十字架を振るう。今まで幾多の吸血鬼を裁いたその十字架を少女が喰らったら一堪りもない。

「やめてください」

十字架を押さえたのは銀の刃。吸血鬼殺しのために振るわれたそれはたった今、吸血鬼を守るために振るわれた。

「何故邪魔をする」

咲夜は答えない。その代わりにナイフに込められた力が強くなる。

「魅了ーチャームーに掛かったか？」

チャームという吸血鬼の能力。その名の通り魅了させる能力。だが人間の魅了と違う。単純に言うなら服従。吸血鬼に魅了された人間は操り人形になる。

今の咲夜は違った自分の意思がある。

「もう止めにしましょうよ」

「止めにするとは？」

「こんなことに意味なんてないんです。吸血鬼とか人間とか、村のためとか、結局全部自己満足な正義なんです。だから止めにしましょう。もう終わりでいいでしょう。私達は殺しすぎた」

吸血鬼を殺した、感情を殺した。あまりにも多すぎる数のそれらを殺した。殺しすぎた。

「お前が言うならそうしよう」

男が言った台詞は咲夜にとってあまりにも意外すぎた。争うと思っていた。血を流す戦いが始まると思っていた。それで終わると思っていた。けれど終わらなかった。

「その代わり、我々に二度と姿を見せるな。そして次姿を見せた時は敵だ」

やたら優しい目をして言った男はそのまま紅魔館から姿を消した。紅い月が浮かぶ紅魔館には吸血鬼の少女と吸血鬼ハンターの少女が向かいあっていた。

「助けて」



「わかりました」

咲夜は答えた。恰も魅了されているかのように。吸血鬼ハンターである咲夜が吸血鬼の側に居れる理由などそれしかなかった。吸血鬼ハンターが罪滅ぼしに吸血鬼に仕えるなど図々しいにも程がある。だから咲夜は嘘を吐いた。

「お嬢様」

「私、レミリアっていうんだよ。お姉さんは？」

「  
咲夜です」

「姓をあげる。服従の姓をあげる。貴女は」

「十六夜よ」

居場所を失った少女は此処から始まった。

## 悪魔の従者（後書き）

咲夜さんの章が始まります。最初の方の工口は書きたかったから書いたのと鈴仙と妹紅を可愛く書きたかったからです

反省はしてる。後悔もしてる

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7578x/>

---

東方改変録

2011年11月24日15時50分発行